

『伊勢物語』 第五十段末尾本文考

後藤, 康文
北海道大学文学部助教授

<https://doi.org/10.15017/9417>

出版情報 : 語文研究. 81, pp.38-44, 1996-06-02. 九州大学国語国文学会
バージョン :
権利関係 :

『伊勢物語』第五十段末尾本文考

後 藤 康 文

一

『伊勢物語』(天福本)第五十段は、五首の和歌とそれらに対して加えられた作者の短いコメントからなりたっている。

昔おとこ有けりうらむる人をうらみて

①鳥のこをとをつゝとをはかさぬとおもはぬ人をおもふものかは

といへりければ

②あさつゆはきえのこりてもありぬへしたれかこの世をたのみはつへき

又おとこ

③吹風にこそその桜はちらすともあなたのみかた人の心は

又女返し

④ゆく水にかすかくよりもはかなきはおもはぬ人を思ふなりけり

又おとこ

⑤ゆくみつとすくるよはひとちる花といつれまてふことを
きくらん

あたくらへかたみにしけるおとこ女のしのひありきしけることなるへし (学習院大学蔵本・三六ウ〜三七ウ)

さて、この章段の現行本文はこのままではどことなく奇妙だ、というような話をはじめるとなると、ますますって想起されるのは、「此贈答のついで、いづれの本も前後わきなくみだりて見ゆ」という『よしやあしや』の発言ではなからうか。すなわち上田秋成は、本章段のはじめから四首目までの歌について、歌相互の整合性に鑑みるならば①と④、③と②とがそれぞれひと組の贈答を形成してしまふべきであつて、この四つの歌は今見ることく①②③④の順序ではなく、元来①④③②の順番に並んでいたのではないかと主張したのであつた。さらに彼は、①④③②から①②③④へと歌順が混乱した原因を、次のように推察している。

○かく編次の乱りしをいかにと尋ぬるに、今の本に、ゆく水と過るよはひと散花といづれ待てふ事を聞らんといふ歌を、何ごころしてか後の人の裏書せしを、又の人のよくもおもはで、すゞ

ろわざして本文に書入しならんを、又後になまわろき人の、行水でふ詞にかゝりて、かれや是とさかしらして、あとさき入乱せし物とおぼゆ、(中略)さて古本にもついでと同じきは、後の人今の本に拠りて書改めしなるべし、この条いかにたすけてとさなすとも、今のついでのみにては、ことわり尽すべからざるほど、これはこれでたいへん興味深い仮説だと思ふ。だが、本稿が以下において指摘したいのは、実のところのこととはまったく異なる(混乱)の存在なのだ。そしてその疑惑の対象となる本文は、最初のことばでいえば「作者の短いコメント」に相当する章段末尾の一文、

あだくらべかたみにしける男女の、忍び歩きしけることなるべし。
にはかならない。ここはどのように考えてみても、「この文章はへんだ」としか思われない不審な箇所なのである。

二

「この文章はへんだ」とはその実、折口信夫ならではのするどい直感が発したことばであった。彼の『ノート編』⁽³⁾には、問題の末尾一文についてこのような所感が述べられている。

○この文章はへんだ。はかない心比べ、浮気比べ。お互いに浮気をしあっておつた男、それから女が忍び歩きしたことを指すんだらう、というのだが、忍び歩きした「ころの事」なんだらう。それならわかるが、これではわからない。(中略)残っている本はみな変っているのだ。

ここでの折口の不審は、もっぱら「忍び歩きしけることなるべし」の部分に向けられていて、かりに本文が「忍び歩きしけるころのことなるべし」とでもあれば腑に落ちるというものだ。ひとまずはおもつとも見識といふべきか、現に、

○浮気のくらべ合いをお互いにしていた男と女が、お互いに人目をしのである。(「全訳注」・現代語訳)

○浮気くらべをしていた男女が、忍び歩きをしていたときのことなのだらう。(「吐文社文庫」・現代語訳)

など、『ノート編』が想定したあらまほしき本文にはからずも合致する解釈——ということとは、とりもなおさず「忍び歩きしけることなるべし」とある現本文に対しては忠実とはいいがたい解釈——もみられないわけではない。

けれども、例の一文に対する疑惑がその程度の域にとどまるものであるならば、それはしよせんとするには足らぬ(疑惑)ではなかったらうか。なぜならば、「ことなるべし」の「こと」を「事」ではなく「言」の意に解し、たとえば、

○これは、浮気くらべを競うた男と女が、おたがいひそかに色恋沙汰にうき身をやつしていた話なのであらう。(「精講」・通訳)

○この贈答は、互いに浮気くらべをした男と女とが、人目を忍んで色恋に浮身をやつしていた話であらう。

(狩野尾・中田「新解」・口訳)
というふうには、「話」などと正しく訳し直してやりさえすれば、折口の(疑惑)はややすやすと解消してしまうからだ。

しかし、である。『伊勢物語』第五十段においてくりひろげられた和歌の応酬を受けての「作者の短いコメント」として見た場合はもちろんのこと、問題を末尾一文じたいの解釈という点に限定しても、今例示したような口語訳をつきつけられた時、われわれははたして、それらを何の抵抗もなく受け容れることができるだろうか。

答えは明々白々、できない相談だ。浮気くらべをお互いにし(てい)た男女が、(別の異性と)密会し(てい)た話なのだろう、のごとき解釈では、この文そのものがそもそも何をいいたいのか今ひとつ釈然としないうえに、肝腎な一段の総括としての機能もまったくはたされていないからである。つまり、それまでの五首の歌からなる本体的内容とあまりにかけ離れた、ピントはずれの評言としか映らないわけだ。第五十段ははたして、ひと組の男女が浮気くらべをお互いにし(てい)た折しも密通をし(てい)た、などということがらをつぶさに描いた章段であつたらうか。「なるべし」とある以上それはあくまで「作者」の忖度にすぎない、といつてみたところで、この場合あまり意味はあるまい。それほど両者の乖離には蔽いがたいたものがあると考へざるをえないのだ。

ところで、「あだくらべ」を「浮気くらべ」の意とする通説に対しては、

○あだくらべははかなき事をいひくらぶる也

(『伊勢物語拾穂抄』師説)

○さてあだくらべとは、かたみにほか心あるをいひきそふとのみにはあらで、累卵・画水・落華・朝露のあだ物もて、云きそひしを云かともおぼゆ

(『よしやあしや』)

○「あだくらべ」は、諸注に浮気比べのこととするが不審。はかないもの比べ、の意ではあるまいか。

(『集成』・頭注)

といった異見が別に提示されてきており、そちらについても、ひとはまず目を配っておく必要があるだろう。というのも、一首目から三首目までの上句「鳥の子を十づつ十は重ぬとも」「朝露は消え残りてもありぬべし」「吹く風に去年の桜は散らずとも」では、いずれも実際には起こりえない現象が、四首目においては「行く水に数書く」という甲斐のない行為がそれぞれ引きあいに出され、さらに、以上を総括する五首目の歌、

行く水と過ぐるよはひと散る花といづれ待ててふことを聞くらん

にいたっては一首の主題それじたいが、まさに(無常)そのものを象っていることを重視するならば、この別解にもなるほど一理はあるかにみえるからだ。ちなみに、これを支持した『全評釈』は、例の一文を次のように訳出している。

○実のない、はかない歌のはかなさ比べをお互いにしました男と女とが、人目に隠れて歩き回っていました歌の文句なのでしよう。

だが、試みに「あだくらべ」を「はかないもの比べ」の意味に解き直してみて、では、それで問題がめでたく解決するかというところ、残念ながらそうではない。(和歌による)はかないものくらべをお互いに展開し(てい)た男女が、(別の異性と)密会し(てい)た話なのだろう、と修正を加えてみたところで、文意の不明瞭さはあい変わらずだし、不可解なコメントという点でも通説と五十歩百歩だといわざるをえないわけである。

本稿では、「あだくらべ」の語義に関していえば、

○あだくらべは、たがひにまけじとあだなるふるまいをなす事也。
〔伊勢物語新釈〕

との意味ではなく、

○互に人をあだ心也といへるをもて、あだくらべとは記者のいへる也。
〔伊勢物語古意〕

○一方が他の浮気をせめると、他もまけてはおらず、あなたこそ浮気であるといい、そういわれれば、一方も、いやあなたがまづ浮気をするから、信ずることができないのだ、責任はあなたにあると、たがいに他をせめて、せめあいになることを「あだくらべ」という。浮気の競争をするのではない。

(西下『新解』・語釈)

○浮気のくらべ合い、男女がそれぞれ浮気で、お互いにそれを認めながら、相手の方を浮気だといひあったこと。

〔全訳注』・語釈〕

といった線で理解することを断つたうえで、とりあえず通説にしたがうものとするが、いづれにせよこうなれば、この末尾本文のいぶかしさはより根源的な次元に由来している可能性が高く、そこまで遡って真相を究明する以外に方法はない、そう判断せざるをえないのであって、結局のところ、現本文のままではどうにも埒があきそうにない、との結論に到達するのである。

その根拠となる不審点をここで具体的に指摘しておくならば、少なくともふたつはある。まずひとつめは、「忍び歩きしけることなるべし」の落ち着きの悪さ。たとえ「こと」の部分で、「という場合」(西下『新解』・口訳)、「時の歌のやりとり」(『評解』・口訳)、「と

きのやりとり」(『全集』・口語訳)、「ことの話」(『講談社文庫』・現代語訳)、「ことを言っている」(森本『全釈』・通解)、「ことを素材とした贈答」(『集成』・傍注)、「ことを歌によみ合った」(『全対訳』・口語訳)、「ことを詠んだもの」(『角川文庫』・現代語訳)等々、どのように迎えて読もうとも、第五十段の内容は、先にも述べたとおり、彼らの「忍び歩き」じたいに焦点をあててその実態を直接に描写したものでは決まてないのだから、そうした話のとりじめが「忍び歩きしけることなるべし」ということはでしめくくられているのは、はなはだ不可解な現象というほかはないのだ。

ふたつめは、「あだくらべ」を「かたみに」するという表現の不思議。理屈から考えて「くらべ」とは、ふたり以上の人間が何か同一の事柄を交互に競うことをいう、元来相互関係を内包する語なのであるから、それを受けてわざわざ「かたみにしける」とつづけるのはいかにも余計な筆法といえ、普通ならば「しける」に直結していてしかるべきところなのである。参考のため、「くらべ」がサ変動詞「す」にストレートにつながる「普通」の用例を左にいりつか掲げておくことにしよう。

●四方に求めむに、豈我が力に比ぶ者有らむや。何して強力者に遇ひて、死生を期はずして、頓に争力せむ。

〔『日本書紀』卷第廿八／日本古典文学大系・二六五(一六頁)〕
●ここにもせらるる中に、こともなきむすめ、誰れ多くものせらるらん。賭け物にして、むすめくらべなどせられよや。

〔『うつほ物語』菊宴巻／古典文庫・五七一頁)〕
●昔の藏人は、今年の春、夏よりこそ、泣きたちけれ。今の世には、走りくらべをなむす。

〔三卷本『枕草子』「めでたきもの」の段／新版角川文庫上・
一一六頁〕

• かかるほどに、御験いみじうつかせ給ひて、中堂に登らせ給へる夜、験くらべしけるを、「こころみむ」とおぼしめして、御心の中に念じおはしましければ、護法つきたる法師、おはします御屏風のつらに引きつけられて、ふつと動きもせず。

〔大鏡〕第三・伊尹／新潮日本古典集成・一六六頁〕

• 此ノ禿ニ値テ力競^リラシテ、勝ム方ヲ貴ビ、負ム方ヲ可被^レ弁キ也。
〔古今昔物語集〕巻第六第二話／日本古典文学大系(2)・五五頁)

こうしてみると、「この文章はへんだ」と敏感に嗅ぎわけた折口信夫の嗅覚それじたいは、あらためて信すべきものであったと評価できよう。当面の本文にはやはり何らかの〈混乱〉が存在していること、ここにいたってまったく疑う余地はなくなったものと思われる。

三

もしもそれが、当初から破綻した一文であったのだとすれば、その忠実な解釈までもが奇妙なものになってしまうのはやむをえぬ結果ではないか、と聞き直ってしまったのでは身も蓋もない。今はあくまで、問題の末尾本文がもとほは論理的に書かれていたはずだとの前提に立って話をすすめなければならぬだろう。

そこで、提案したい。要するに、逆転してしまったのではないか、この物語の長い伝来過程のかなり早い時点で、「あだくらべ」と「忍

び歩き」とが、入れ替わってしまったのではないかと。すなわち、本来は、

A 忍び歩きかたみにしける男女の、あだくらべしけることなるべし。

とあったはずのものが、その時点から今日見るごとく、

B あだくらべかたみにしける男女の、忍び歩きしけることなるべし。

に変化し、無用な〈混乱〉を将来する結果に陥ってしまったのではないかと、ということなのだ。

今かりに、A が末尾本文の原形であったと想定してみるならば、これまで現本文B に対して纏々述べたててきたいぶかしさやもどかしさは、一挙に払拭されるのではないかと思う。このかたちだとその文意は、

(これは、別の異性と)密会をお互いにし(てい)た男女が、
(歌によって)どちらがより多情であるかを負けじと競った話
なのであろう。

あるいは、

(これらは、別の異性と)密会をお互いにし(てい)た男女
が、どちらがより多情であるかを負けじと競った歌なのであ
ろう。

くらいに解せて、実にスムーズに意味が通るようになるのである。「あだくらべかたみにしける」ではなく、「忍び歩きかたみにしける」であれば、先に指摘した表現上の不自然さはまったくなくなるし、彼らの「忍び歩き」も背景に退いて好ましい。逆に、「忍び歩きしけることなるべし」ではなく、「あだくらべしけることなるべし」

とあることによつてはじめて、この一文が話の最後に添えられた作者の短評として円滑かつ有効に機能することになる。あらためて言を費やすまでもなく、第五十段において華々しくくりひろげられたのは、あなたこそ浮気者とはりあう男女の、いわば「歌合戦」にほかならなかつたからである。

では、こうした逆転現象はどうして生じたのであろうか。それに対してゆるぎない解答を提出すことはもとよりたいへん難しいわけだが、このケースの場合、単純な〈誤写〉は少々考えにくいだろう。だとすれば、おそらくはA本文を前にした平安朝のある書写者が、「しける」の重出にも幻惑されてか、「忍び歩き」と「あだくらべ」とがあべこべだとさかしらな判断を下してこの両語を入れ替えてしまった。その結果〈混乱〉したB本文が誕生したという可能性がもっとも高いのではあるまいか。そして、こちらの子孫だけが今まで偶然生き残る運命をたどつたということになつてこよう。

四

証拠はもちろん、どこにもない。塗籠本の当該箇所が、

あたにてたかひにしのひありきする事をいふなるへし
と大きく異なつていふことや、真名本が二回目の「又おとこ」以下
五首目の歌までをそっくり欠いているといつた事実は知られても、
本稿が想定したとおりの末尾本文を有する伝本が、現に存在してい
るわけではないのだ。したがつて、先の推定本文のごときはしよせ
んいいかげんな思いつきの産物にすぎないとしてこれを却下するこ
とも、また、許されない改竄行為だとしてこれを一蹴し去ることも

自由ではある。

だが、問題をあくまで理詰めに追究した場合、現行の本文はいくら苦心してもうまく筋を通すことの不可能な代物だと判定せざるをえず、そうである以上、〈混乱〉をかかえた本文、

あだくらべかたみにしける男女の、忍び歩きしけることなるべし。

を馬鹿正直に、もしくは情性的に尊重して、意味不明の解釈を施しつづける態度も考えものだといわざるをえないのではなからうか。それくらいならばむしろ、理に叶つた推定本文、

忍び歩きかたみにしける男女の、あだくらべしけることなるべし。

に賭けてみてはどうかと、そう主張したのである。

あるいは最後に、このような問いかけを試みるのも一興かもしれない。『伊勢物語』第五十段の五首目の歌につづいて、今かりに、ふたつの空欄xとyをもつ、次のような一文が置かれていたとしよう。

Q「x y」かたみにしける男女の、「y」しけることなるべし。

そして、この文の二箇所の空欄部分を埋めるべき候補として、(1)「あだくらべ」と(2)「忍び歩き」の二語のみが用意されていたとしたら、われわれはいつたい、そのどちらをどちらの空欄に充当するであらうか、と。

『伊勢物語』の現存諸本がすべて鎌倉時代以降のものであつてみれば、たとえ定家書写のお墨つきがある場合でも、それ以前にこの作品の本文が流動し変成していた可能性はじゅうぶんにあつたとい

えるだろう。そうした「可能性」を探る営みの一環として、本稿では第五十段の末尾本文にスポットをあて、以上のとおり、きわめて大胆な仮説の提起を試みたしだいである。

注

- (1) 引用は、『上田秋成全集』第二巻(国書刊行会、昭四四)による。
- (2) 「こ」は列擧したる歌に對する後人の註脚なり、作者の筆にはあらずとする『詳解』あたりからであろうか、この部分を後人の注記と考える立場もあるが、したがえない。
- (3) 本稿で引用する近・現代の注釈書とその略称は以下のとおり。鎌田正憲『考證伊勢物語詳解』(南北社出版部、大八)↓『詳解』、池田亀鑑『伊勢物語精講』(学燈社、昭三〇)↓『精講』、西下経一『伊勢物語新解』(明治書院、昭三三)↓西下『新解』、上坂信男『伊勢物語詳解』(有精堂、昭四三)↓『詳解』、『折口信夫全集・ノート編第十三巻』(中央公論社、昭四五)↓『ノート編』、狩野尾義衛・中田武司『伊勢物語新解』(白帝社、昭四六)↓狩野尾・中田『新解』、森野宗明『講談社文庫・伊勢物語』(講談社、昭四七)↓『講談社文庫』、福井貞助『日本古典文学全集・伊勢物語』(小学館、昭四七)↓『全集』、森本茂『伊勢物語全釈』(大学堂書店、昭四八)↓森本『全釈』、渡辺実『新潮日本古典集成・伊勢物語』(新潮社、昭五一)↓『集成』、永井和子『全対訳日本古典新書・伊勢物語』(創英社、昭五三)↓『全対訳』、阿部俊子『講談社学術文庫・伊勢物語全訳注』(講談社、昭五四)↓『全訳注』、石田穰二『角川文庫・新版伊勢物語』(角川書店、昭五四)↓『角川文庫』、中野幸一・春田裕之『伊勢物語全釈』(武蔵野書院、昭五八)↓中野・春田『全釈』、竹岡正夫『伊勢物語全評釈』(石文書院、昭六二)↓『全評釈』、中野幸一『旺文社文庫・伊勢物語』(旺文社、平二)↓『旺文社文庫』。

- (4) 引用は、『北村季吟古注釈集成』2(新典社、昭五一)による。
- (5) 従来指摘されていないようであるが、この歌は、『寛平御時后宮歌合』にみえる一首「散る花の待ててふことを聞かませば春降る雪と降らせざらまし」と密接な関係にあるように思われる。
- (6) 引用は、『全評釈』所収の文政元年版本翻刻に基づく。
- (7) 引用は、北海道大学附属図書館蔵寛政五年版本に基づく。
- (8) 『全釈』、「この文、やや要領を得ない」(角川文庫)といった評語を見いだすことができる。
- (9) 関連する拙稿には、『伊勢物語』誤写の論——第六十七段の場合——(『文学・語学』第百三十九号、平八・二)、『伊勢物語』誤写の論——第五十八段の場合——(『国語国文』第六十四卷第十一号、平七・一)、『伊勢物語』誤写の論——第七十七段の場合——(『国語国文研究』第百三号、平八・五)があり、また、最近の論としては、第四十六段の本文について、「人の国」へと下った親友からの手紙文の末尾部分がもと独立した和歌であった可能性を考証した、迫徹朗「歌のゆくえ——『伊勢物語』四十六段をめぐる——」(『尚綱大学研究紀要』第十七号、平八・二)や、この見解を支持し補強を図る、妹尾好信「世の中の人の心は目かれば……」追考——『伊勢物語』第四六段贈答歌の痕跡——(『古代中世国文学』第七号、平七・八)などがある。